町民文芸

只見短歌会　五月詠草

大塚栄一　指導

娘らは皆離れ住み居て老一人今日も語り合ふ事もなく過ぐ　馬場　八智

行く先の途中大きな桜の木春のなごりの花びらの舞ふ　関谷登美子

置き薬の取り替へに来し人若く親しみの湧く方言聞けず　目黒　富子

腰病みて菊の根分けも出来ずなり嫁に頼みて指図するのみ　渡部ゆき子

高熱の続く孫連れ診察を待つ間の時の流れ遅しも　新国由紀子

孫思ひ野菜の苗を植ゑくれば活きつくまでの水やりも楽し　渡部ヨリ子

保育所の休日なればひ孫待ち朝より幾度も時計を見上ぐ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　六月定例会

目黒十一　指導

切り株に湿りの残る夏木立　礼

新緑や轍に足を踏み外し　一穂

鎌倉やどの寺行くもあじさい花　一穂

夏灯し遺影幽かに微笑みて　修一

ぶな若葉見上げる顔や夕陽差す　修一

手術の日明日となりてや夏の夕　吉児

一山をつつじ点綴只見線　吉児

大白の朧を裂きて夜のしじま　幸生

登らぬ山登り得ぬ峰山開き　幸生

ほうたるや狩るほど飛ばず過疎の村　信

起こすなよ吾子の歯見ゆる昼寝時　信

桑の実に唇染めし幼き日　都

真青にアスパラ茹でてこれでよし　都

木蓮やホームの母のいじらしさ　味代子

田を植えて畦にポットの忘れ物　味代子

道すがら額紫陽花の色甘き　弘子

蕗の葉に包み桑の実妣憶う　弘子

梅雨寒やふっとため息物忘れ　一恵

教え子のよきパパぶりやふき畑　一恵

おたまじゃくし掬ぶ子の手の小さきよ　恒夫

なにごとも二人でひとり梅雨寒し　恒夫

万緑や闘牛の村憶いけり